

企画・編集：福倉良彦 川崎医科大学 機能・代謝画像診断学教室

序 説

われわれが日常の腹部画像診断を行ううえで、最も基本でありながら常に立ち返るべきものとして「正常解剖」と「ノーマルバリエント」がある。肝・胆・膵、泌尿器、生殖器、消化管、さらにはそれらを支える間膜や脈管系に至るまで、腹部領域には実に多彩な正常構造とその変異が存在する。これらの多くは生理的あるいは発生学的背景を有するが、ときに病変ときわめて紛らわしい像を呈し、診断を迷わせる。さらに、正常と異常の境界は必ずしも明瞭ではなく、その見極めには知識の蓄積だけでなく、画像の本質を丁寧に読み解く姿勢が求められる。

近年のCTおよびMRIの進歩により、われわれはかつてないほど精緻な画像を日常的に扱うようになった。その結果、微細な形態変化や多様なバリエーションを容易に描出できるようになった一方で、「どこまでが正常か」という問いに改めて向き合う場面も増えている。過剰診断や不要な追加検査を避けるためにも、また真の異常を拾い上げるためにも、正常像とその変異を確実に理解することは、今なお読影の原点であると感じている。

本特集「いまさら聞けない正常解剖＋ノーマルバリエント：腹部」では、肝・脾、胆道、膵、腎泌尿器、生殖器、間膜・消化管の各領域において、CT・MRIを中心に、日常診療で遭遇しやすく、かつ病変との鑑別が重要となる正常解剖および代表的なノーマルバリエントを厳選した。単なる形態の列挙ではなく、連続画像のなかで構造をどのように追うのか、どこで誤認が生じやすいのかという実践的視点を共有することを意図している。

「今さら」と思える基本事項ほど、実は診断の精度を大きく左右する。本特集が、日々の読影のなかでふと立ち止まり、正常を見直す契機となればこれ以上の喜びはない。腹部診断に携わるすべての読影医にとって、机上に置いて繰り返し参照していただける1冊となることを願っている。

福倉 良彦